

浄土

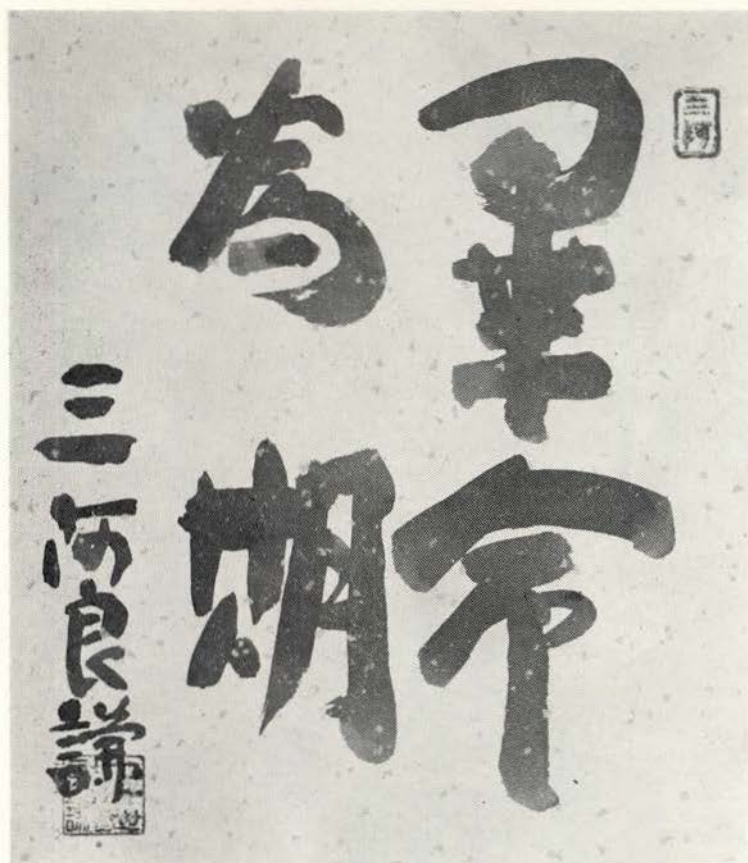
昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌)第三二五号
昭和五十年二月二十五日印刷 昭和五十年三月一日発行



第四十一卷

第三号

1975
3



畢命為期

堀田良謙

(静岡市華陽院任職)

これは申すまでもなく、選択集第二章段中のことばであります。私の最も肝に銘じているのは「心をはげまし、己を責めて昼夜癡することなく畢命を期とすべし」の二十八字であり、畢命為期はその四字であります。

私が大正四年十月十七才の時、浅草の源空寺にて五重相伝のお手伝いをした時、勸誠師様の賛題でありました。母親と辛い別離をして寂しい思いで上京した私の心の中に喰い入るように、このことばが響いたのであった。

あれから六十年、大東京は関東大震災と、第二次世界戦争にて、二度の大変革があり、漸く世界の大東京となった。静岡もまた昭和十五年の大火と、戦災の苦難を経て今日に及んでいる。

思えば私はよく生かされたものであります。この座右銘は、今尚私の心の中に躍動し、精進の光となっている。

三 月 号



目

次

畢命為期.....	堀田良謙
三師の導き.....	上野馨雄…(2)
彼岸のころ.....	吉沢堯州…(5)
現代のモラルを考える②「殺生」	
殺生戒—我が生命を大切に.....	佐藤密雄…(10)
よりよく生きるために.....	奈良博順…(15)
心の履歴書①.....	川内知光…(18)
欧州宗教見聞録②「お墓」.....	安居香山…(23)
ご法語に聞く 法然上人の人と生活③	
学問の道.....	宝田正道…(28)
経典を読むために —「大藏經」の由来—.....	小沢憲珠…(33)
ハガキでひと言 彼岸に想う.....	36
——齊藤英明・秦徹応・上野浩・正本実閑——	
念仏ひじり三国志① 法然上人をめぐる人々.....	寺内大吉…(38)

表紙 久住静雄画

カフツ 大正大学美術部



早春の梅花

春の訪れをきくと、私の心は自然に柔和になります。春という字には、瑞祥の吉兆があると、昔から伝えられております。

早春になると奈良の小寺の座敷の床の間に「さえかえる、春のゆふべの月影に、おぼろげならぬ、梅が香ぞする」と福田行誠上人が詠ぜられた、掛軸をかけて上人を、お慕いたします。

上人は明治二十年に総本山知恩院第七十六世の門主となられ、近世の名僧として、各方

三師の導き

上野 馨 雄

(総本山知恩院顧問
奈良市念声寺住職)

面の人々より帰依をうけられたのです。

現在知恩院の友禅苑は、昭和の名園と称せられますが、その池中に立つ優雅な立像の、大観世音菩薩の銅像は、上人を敬仰する人々によって建立されたものです。

京都の淡川康一博士は、行誠上人に深く帰依されて、上人の事蹟を研究されて、先年知恩院主催の文化講座に出講されて、上人の遺徳を讃仰され聴衆に大きな感銘を与えられたのです。私はご縁があって、博士の書かれたおぼろ月と梅花の墨絵の上に、この歌を配した書をいただいたのです。

上人のお歌を何回も拝読しておりますと、やわらいだ暖い気持ちになるのです。最近の世相は、丁度寒風に吹きまわっているような、きびしさを感じます。しかし上人のお歌にあるように、ほのぼのとした梅花の香りの如き、温い阿弥陀仏の御本願である、お念仏の功德によって、私は毎日有難く生かされております。

花語らず

南禅寺管長の柴山全慶老師は、生前に花園文庫で「花語らず」と題して所感を述べられておられます。その序詞に「花は黙って咲き、黙って散って行く。そして再び枝に帰らない。けれども、その一時一処に、この世のすべてを、托している。……」と書いておられます。老師は知恩院夏安居にも出講されましたが、花を眺めても厳しく、自然と人生の探究をつづけられ、私達に自己を深く見つめることを、教えられたのです。

昨年夏、老師は八十一歳で遷化されたのですが、その遺偈は「担雪填井八十年、端的無別長伸足眠」とあります。その意味は、雪をかついで、井戸の中に入れても、決して埋められないことを、私は八十一年間やってきた。そして今、長く足を伸して眠るのであると、いうことだと思ふのです。

昨年十一月号の文芸春秋特別号で、田中角栄研究―その金脈と人脈、淋しき越山会の女王のレポートを読みました。田中前首相も、雪の如き富をかついで井戸の中に、巨大な私財を投げ入れたようなものでは、ないかと思ふのです。

しかし禅家の老師は、自分は無駄なことばかり八十年間してきたと、反省されておられますが、その無駄の中には、無功德の功德を達成されているのです。

現在の政界財界の人々も、老師の遺偈をどのように、受けとっているだろうかと思ふのです。この世は物欲の満足だけでは、立派な

人生を送ることは、できないと老えるのです

導きたまえ観世音

私の親しい老居士は、清水寺貫主、大西良慶和尚を恩師として、敬慕しております。昨年未だに和上にご挨拶に伺ったときに、聞いた話であります。

「人間は、常に、心を使い、決して氣を使わぬことだ。これが長寿の秘訣だ」と申されたそうです。

和上は本年、百一歳の新春を迎えられたのですが「心を使う」ということは、仏書を拝読し、法話を聴聞し、毎日自分の心を清めることである。「氣を使わぬ」とことは、名利や強欲から離れることである。私は毎日の出来ごとを、清水寺の観世音菩薩に一切おまかせし、お指図通りに暮しているから、心が平安だと説明されたそうです。

「父母のふかき情のこの身なり、導きたま

え南無観世音」と昨年満百歳を迎えられたとき、詠ぜられた歌ときいております。

まかせる心

春彼岸を迎えますと、私達は彼岸の浄土に到るため、身心の修行に励むときです。私は行誡上人・全慶老師・良慶和尚の先達の名匠が教え、導き下さったお言葉を、余世の指針として有難くいたしております。

宗祖法然上人が、すべてを阿弥陀仏の本願であるお念仏に、身心ともにおまかせして、ただ一向に念仏せよと遺訓されたことは、この上もなき喜びと存じます。

南無阿弥陀仏の南無とは「どうぞ」ということであります。仏にどうぞと、一切をおまかせして、現世を生活できることは、幸福だと信ずるのです。彼岸の浄土に導き給う阿弥陀仏に、心からお念仏を唱えるのが念仏者の生活だと、私は信じております。



彼岸のころ

吉沢堯州

(総本山知恩院布教師会長
京都市東山区正林寺住職)

今年の冬は例年よりも暖かく過ぎ易かったようではありましたが、それでも時には零度を下廻る寒さに縮みあがったことも幾日ありました。立春も過ぎ、三月に入りさすが春のお彼岸を迎える今日此頃になりますと、毎

年のことながら、一年中でこの時季が一番楽な恵まれた時だな、という季節感を味わさせて頂きます。クーラーを入れて自然に逆らい、暖房をして一瞬の暖をとることも、それはホンの室内だけの誤魔化しで、所詮矛盾の域を脱するものではありません。外気に触れてみる時、暑さは暑さ、寒さは何処までも寒さで、敵としてこの自然

の力を拒げることは出来ません。その点お彼岸になりますと、暑からず、寒からず、科学の力を超えた大自然の懐の中に抱かれる有難さを、しみじみと感ずるのであります。

この頃になりますと、私の住む京都の東山、特に牛若丸、弁慶で名高い鴨川の五条の大橋を東に突き当る処、東山三十六峰の南端、西大谷から清水、鳥辺山から阿弥陀ヶ峰の一带は、昔から鳥辺の山に立つ煙で有名な幾万の墓碑のある一大霊園であります。平素は静かな環境に恵まれ、今でも朝早く杜鵑の声、鶯の谷渡りの美しい声

にふと眼を覚すこともあり、四季とりどりの野鳥の囀りにうっとり時を過すこともあります。平素はご無沙汰をして居りましたが、お彼岸になりますと、老人も若い人も、親も子も、お花をかかえお線香を持ちご先祖のお墓詣りで、交通整理のお巡りさんが出る位の雑踏を呈するのであります。ここには恐らく人間疎外もなければ断絶も孤立もご座いませぬ。私はこの微笑ましい姿に接する時、諸外国に見られない日本特有の、日本人ならではの国民性の美しさというか麗わしさを感ずるのであります。

勿論、これは仏教が印度で起り、中国に渡って花が開き、日本に伝わって実が結んだと言われる通り、千三百年の仏教の永い歴史と、格調高い伝統と教化に依って培われ、日本国民の生活と密着したものが如実に現われているものであると思うのであります。

平素は生活の忙しさに追われ、うっかり時を過して居りまして、せめてお彼岸の季節だけでもご先祖の供養にと心掛ける人の姿、それはそれなりに尊いものであり、時代の流れが如何に変わらしようと、恐らく日本の

国が存続する限り、この麗わしい姿は永続するものであることを信ずるのであります。しかし、お彼岸とはお墓詣りをするものなりの定義で片付けて仕舞うものでないことは申すまでもありません。

彼岸とは彼方（かなた）の岸、向うの岸ということ、目標の世界であり理想の境界（きょうがい）であり、此方の岸より彼方の岸に到達することを意味するもので、随ってその人により理想、目的とする彼岸は色々、まちまちであります。物慾にとらわれた人にしてみれば人生一度は億万長者になってみたい、これは金を理想とした人であり、どんな違反を重ねても、人に迷惑をかけてもかまわない、一度は国会の壇上に立ってみたい、これは名誉を彼岸とする人であります。ここで申します彼岸とはそういう名利にとらわれた目標ではなく、波羅密多即ち心の彼岸、心の目標を何処に置くかということで、私の最後に到達しなければならぬ世界は、一体何処かということ、これを釈尊はニルバーナ、即ち涅槃の世界、寂光土、解り易く言えば極楽浄土であ

ることを示されたのであります。ところが若い人達はこの極楽浄土という言葉に相当抵抗を感じるようで、これがかつきりと理解出来ないのと彼岸の意味も充分味わうことが出来ないと思うのであります。

極楽浄土とは一体何でありましょう。端的に申しますれば、心の故郷（ふるさと）であり、お彼岸とはつまりは心の故郷に到ることであります。

故郷（ふるさと）何と懐しい言葉でありましょう。人間が何時、何処に、何して居りましょうとも、又、その境遇が如何なる立場に置かれましょとも、忘れ難きものは故郷であります。

朝日さす軒端の雪も消えにけり

わがふるさとに梅や咲くらん

安政の大獄に囚われの身となり、独り淋しく獄窓に泣いた、吉田松陰先生の歌であります。故郷、実にふるさこそ、我々にとって終生を通じて忘れ難き処であります。では、その故郷の忘却することの出来ない理由は何に由るものでありましょう。私は二つの理由があると思います。

其の一つの理由は、我家、我故郷は誰に遠慮気兼ねのない油断の出来る処であり、安心の出来る憩いの場であるということでありまして、現代は旅行ブームの時代で、老も若きも人が三人寄れば大抵旅行の話であります。それが只国内だけでなく、遠く国外までも足を延すことが多くなりました。世界各国何処の国にまいいりまして日本人の観光客に逢わぬ所は無いと言う位、日本人は旅を楽しみますが、それじゃ、旅はそんなに楽しいものかと言えば、私は決してそういうものではないと思います。旅には旅の苦しみが必ずつきまといます。時には思う通りにならん不自由なことも沢山あります。成る程、お金の遣い方、暇の費し方で甲斐性のある人は、どんな豪華な贅沢な旅行でも出来ますが、所詮旅は何処までも旅で、その証拠に旅から家にお帰りの時、殆んどの人が、何処へ行ってみてもやっぱり自分の家程良い処はないなあとお仰言います。全くその通りで、此の世の中でやれやれと心の許せる処、安心の出来る処は、我家、我故郷以外には絶体外に求めることは出来ないものでありまして、やはり我家がよい、故郷に帰りたい、これが私達

の一番の望みではないでしょうよか。

今一つの理由は、故郷には親が居て呉れるということ
であります。

お彼岸一週間の修養に六波羅蜜がありますが、その第一が布施の行であります。布施の最高は無畏施と申しまして、これは人の喜びを自分の喜びとし、他人の苦しみを私の苦しみとする、即ち苦楽を共にしてやると云うことでありまして、財施、法施はその人の立場によって努力すれば、ある程度は可能ならしめることは出来ますが、相手の気持を其の人の身になって素直に受け取ってやることは簡単なようではありますが、仲々六つヶ敷いことで、余程の人でなければ出来ない業（わざ）であります。これを行える人は親を置いて外に見出すことは出来ないと思うのであります。特に子を持つ母の心——しかし、この頃の若いお母さん達にはこれに当てはまらない人のあることは確かにあります——これこそ、真の無畏施の標本でありましょう。それであればこそ、子にとって母の存在こそ忘れることの出来ぬ尊い重みと言ひ

ましようか、安らぎと申しましようか、落ち着きと安心感を与えて呉れるものであります。

私には二人の子供が居りますが、私から見れば勿論親子の關係にありますから、親馬鹿で、子供は幾つになっても子供であります。世間の人から見れば二人は既に立派な社会人であります。この二人が外から寺に帰って来た時の挨拶に必ず「只今——」と言います。これは誰しも使う普通常識の挨拶で、ところが只今の次に出る言葉は必ず、お母ちゃんは、と言ふことであります。お父さんとは余り申しません。母が家に居りますと、やれやれと安心出来る。居らんと何処へ行つた、何しに行かへつた、何時頃帰つて来るかの質問であります。私は此処に母の存在の偉大さに心を打たれると共に、何がかくくあらしめるものであるかと常に考えさせられるのです。それは子にとって母こそ私の無畏のお布施で育てて呉れた、この人こそ真に頼れる人であり、総てを任すことの出来る人、一切をぶちまけても包容してくれる、世界で只一人の人であると云うことが、只今——お母ちゃん、と言ふ言葉となつて現われて来るものであると思ふ

のであります。こういう尊い親が故郷に待つて居て呉れるということが、郷愁となり、故郷忘れ難きもののあることを切実に感ずるのであります。

そういったしますと、終生を通じて故郷忘れ難き理由は、そこには無畏の親さまが待つて居て下さること、この世界こそ真に油断の出来る安住の場で、誰に遠慮気兼ねのない開けっ放しでもものの言える、所謂極楽の世界であるということに結論づけられる訳であります。お互の肉体は生ある以上、ここに死を難れることは絶体出来ません。このはかなき浮世の故郷でさえも、これ位望郷を与えるものであります。まして永遠に生きる心の故郷を真剣に追求し、その目標に向つて人生を一步一步前進し、永い人生の最終目的を極楽浄土に求めることの大切さ、更に出来得べくば現世の生活の中にこの理想の実現を可能ならしむる努力こそ、お彼岸を迎えて到彼岸を意義あらしめるものであることを思うのであります。法然上人は、建暦二年正月二十五日におかくれになりましたが、そのご往生が近づきました時にお弟子の一人が、「お師匠さま、この度のご病氣ご回復も覺束なく存じあ

げますが、これから何処においてになりましたか」とお尋ねしますと、

「われもと極楽に在りし身なれば定めしこの度は極楽に帰るべし」

と仰せられたとのことでありまして、極楽から来たんだから極楽に帰るのだ。至つて簡単であります。偉大なるお言葉であると思うのであります。この目標さえ誤りなく定まつて居りますればよし、此の世（此岸）の旅路は苦悩に充ちましようとも、やがてお浄土（彼岸）に帰り、親さまの下にてのびのびと誰に遠慮、気兼ねすることなく、心の故郷の味わいを味得させて頂ける境地こそ、信仰に生きるものの喜びであると思うのであります。現代社会は、余りにも物に片寄り過ぎ、心が忘れ勝ちになつております。その結果が人間が人間から離れ、孤独、断絶、人間疎外などの悲しい現実が、其処此処に現われ、自分のことで精一杯で人のことを考える余裕がありません。今此処に春のお彼岸を迎え一度改めて、私というものを篤くと考えてみたいと思います。

人であると、共に人間であるということ。

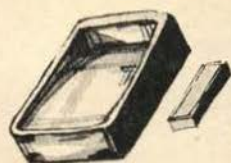
殺生

|| 現代のモラルを考える ||

△第二回▽

殺生戒

— 我が生命を大切に —



佐藤 密雄

(大正大学名誉教授)

(一)

先頃、木曾駒の春山号の安楽死が問題になった。純血の唯一頭であったとか。人間の年令にすると百歳を超えて居り、老衰のきざしもあった由。木曾駒は短足であるが強力である。その昔、木曾冠者義仲が、京都を目指して駆けのぼってきたのも、この木曾駒であったろうし、農耕馬としても、挽馬としても強健そのものであったが、残念乍ら、純血馬で今

まいるのは、此の春山号唯一頭のみである。他のものは、形をよくする為めに、混血改良されたものばかりである。此の春山号のみが本来の、木曾駒の姿相と毛色とをもっている。とされる。そこで、此の春山号を、毛色其他が老衰変色しない間に殺し、はくせいにして保存したいと言うのが、此の馬に安楽死を与える理由となっている。保存の目的は、遺伝の法則によって、現在いる雑種の中から純血種が生れた時に、其れを見分ける為めの、標本にしたい、という。勿論、純血

の原種を見出し、それを増やして保存しようとするのであるから、春山号の余命も、多くは期待出来ないものであるし、かたがた薬で安楽死させ、標本を作りたい、というのも一理はある。然し、同族の爲めに、一命をささげる自覚を覚悟出来ない馬に、其れを強いることに反対者も多かった。でも、春山号は、はくせいにされてしまった。他の馬の場合はどうか。競争馬の場合は、種馬や出産馬として役立たなくなる、と、薬で安楽死させるのが常例となっていると言われ、春山号のみならず、不用老動物の安楽死は常例化されている。

人間の場合はどうか。これは永い懸案であつて、安楽死を合法化している国はない。既に死が決定的である病人を前にして、然もただ頻死の苦痛のみが残されている時、或いは、注射等によつて、心臓のこどうだけを保たせているに過ぎない時、これを安楽死させることは、時には近親者の願ひであることもある。

二月の初め、スイスのチューリヒ市では、安楽死を合法化するために、市民投票を行うことに定まつた。提案者は、市民投票で、安楽死が認められれば、全国投票となすことによつて、全国に合法化したい、としている。但し、安楽死を行う条件を五箇条上げているが、その中に、当人の承諾を得た後、七十二時間目に、再確認することが記されてある。新聞

電報の誤りでないとすれば、これは出来ない相談である。がん患者に直接病名を告げることさえ、未だ一般化されていない今日、そのようなことは、極めて困難であり、病人に死を確認することは、酷といわねばならない。

私も三十数年前、母が腸がんの手術をした。私は、従兄でもある執刀医に、助かる見込みのない者を、くるしめるよりも、苦痛感のないようにして、静かに死を待つべきではないか、と申出た。その時に、僧である私は、俗である従兄の医師から、生命の続く可能性を、能う限り努力するのが医道である。宗教家もそのように考えないか、と言われた。なる程、受け難き人界に生を受け、あい難き仏法にあえた生命である。浄土真宗の信者であつた母は、手術の苦しみを、あなただ様（阿弥陀仏）に会える一閃として、堪えた。開法の功德であつた。一ヶ月程法悦にひたつて、天寿を終えた。私は開法の有難さを、此時程思い知らされたことはない。

(二)

仏教に不殺生戒がある。これは在家にも出家にも、共通のいましめである。自分の置かれた位置を知り、また宗教を自覚し、何をなさうかを意識して、我が生命を生かし得るのは、生もの多き中にただ人である。自分にとつても生命は尊

い。同じように、他の生命も尊い。仏教のみでなく、すべての宗教は、人間に生れたことを、生命を尊ぶことによつて、意味あらしめるのである。不殺生戒は、自分を生かし、他をきつけない為めのものである。仏典には、杖や、刀を、人をきつつけ、生き者を迫害する為めに、持つてはならないと言う。インドへ旅行する宗教家が、蚊を打ち殺すことを、笑われることがある。数千年間を、インドのすべての宗教が、殺生をいましてきたことに由来する。

今述べた不殺生戒は、仏教徒すべての為めの不殺生戒であるが、お釈迦様が、出家の弟子の為に、特に禁じられた行為の中に殺人戒がある。出家の禁律の中に、弟子がこれを犯せば、追放されて、永久に出家となれない罪に四つある。いわば断頭罪であるが、淫戒と盗戒と殺人戒と大妄語である。四つの中で、やや一般に解りにくいのは、大妄語であるが、これは、未だ聖道を体得しない者が、聖者をよそおつて、一般信者から、尊敬や施物を受取ることで、出家の陥入り易い、然し最も悪徳な行為である。

さて、凡そ、殺人等を為す筈もない出家の弟子に、殺人を最も重い罪として禁じられたのは何故か。今日でも、蚊を叩くことすら咎められるインドである。出家の弟子に、特に禁律を設けて迄、殺人を禁ずる必要があつたか。お釈迦様自身

も、經典の中で、仏弟子達は、他に危害を与えるようなことはない、慈心に満ちていることを誇りとしておいでになる。

禁制としては、殺人を禁ずることは、当然とも言えるが、殺人する筈もない出家弟子に、禁律をもうけてまで禁ずることはあるまい。むしろなきがまさるというべきである。それなのに、なぜか。そこで、そのような禁律の出来た原因を調べると、それなりの理由があつた。

禁律の内容は、(一)人命を断つてはならない。(二)人に殺具を与えてはならない。(三)人に死をすすめてはならない、とある。

先づ此の禁律の出来た理由、即ち戒因縁とされるものを見ると、次の様な話がある。

バグダー河の近くに居た一群の弟子達は、不浄觀をなしていた。不浄觀というのは、修道そのものではないが、その前提となるものである。修道するには心を静めねばならない。心を乱す第一は欲心である。とくセックスの欲望である。出家者の出家とは、第一にセックスを離れることであるが、修道の為に心を静める第一手段は、このセックスの欲望を静めるにある。そこで、不浄觀によつて、異性の人体を不浄と観念するのである。姿態の外観は美しくとも、内面は種々の不浄に満ちていることを観念して、異性に対する欲望

の克服につとめて、心の平静を保つてから、修道に入るのである。

ところが、バグダー河畔の弟子達が、この不浄観を誤った。人体は不浄であり、苦に満ちている。この身を捨てたい。即ち誤って、厭世観を持つに至ったのである。或日、弟子達の所に鹿杖という、恐らくは鹿皮を取って着衣とする一種の行者が現れた。刀を持っていたので、厭世観に陥入った弟子達は、着衣持物を与える約束で、殺して貰った。鹿杖は初め、人命を断つことをためらったが、仏弟子達の、たつての願いでもあり、且つ利得にもなるので、ついに死を求める仏弟子を積極的に求めては、その命を断つことになった。此のことが、やがてお釈迦様に聞えたので、弟子達の誤った理解を叱責され、厭世観に陥入り易い者には、他の心を静める観を教えることにして、人命を断ずることを禁ずる、殺人戒が定められた。

(一)

(1)殺人戒は、上記の話の、殺し屋の鹿杖の行為に対して定められたものではない。自分の死を求める仏弟子達に向つて、制せられたものである。此場合の戒とは、出家弟子の非行を禁ずるものであつて、鹿杖の如き、出家弟子以外の

者には、全く関係ない。従つて、ここで禁じられている断人命の、即ち禁律内容の(一)「人命を断つてはならない」という中の、差し当つての人命は自分の命である。自殺は自分の命を断つことで、断人命であり、殺人罪なのである。自分の命を断つてはならないのであるから、他人の命を断つては、勿論いけないのである。

(2)戒内容の(二)「人に殺具を与えてはならない」とは、勿論、人に刀等を与え、命じて、自分の憎む相手を殺させることは、禁じられることであるが、この禁律の主たる目的は、二つある。一つは、他人に刀等の殺具を与えて、自分を殺すこと、今一つは、死を求める病人や、既に生きる望みのない病人に、自殺の道具や薬を与えて、自殺させることである。

出家の弟子達に、お釈迦様から与えられた、きびしい命令義務があつた。それは、仲間の病人を看護することである。家庭を出た出家には、家庭的な身寄りが断たれている。従つて、出家者仲間では、互に父子兄弟の愛を以て、病氣になつた者を、看病しあわねばならない。これは、出家たるものの義務である。お釈迦様も、糞尿にまみれた病弟子の身や衣服を洗いながら、看病につとめられた。

問題は看護する者にも、看護されるものに、最早死をまつ

ばかりで、然も苦痛のみが続く場合も起る。病人の方から、この苦から脱れたいと、刀等の自殺具を求め、若しくは自己の持物の中に薬品の有すことを教えて、自分を殺して貰うことである。この場合の殺人罪は病人が犯したことになるが、それに応じた看病人も同罪である。今一つの場合、病人が苦の余り死を求めてやまぬ時に、看病人が、病人の枕元等に、刀や薬などを置き、自分はその場を離れた、その間に自殺に至らしめる場合である。勿論、死んだ病人は自己の人命を断じたことになるが、看病人も殺具を与えたこととなつて、両者共に殺人罪を犯すことは言う迄もない。

これによつて考えると、仏教では安楽死は成立しない。今年の二月の初め、イギリスで、老妻を死前の病苦から救う為に、夫が薬品で安楽死させた事件の判決があつた。愛情深い夫婦であつた。愛情の故に、妻に苦痛なき安楽死を与えて、法律上の殺人罪に問われることになつたが、裁判官は、この夫に一日の禁錮を与えたという。日本流に言えば、大岡さばきである。然し、此の大岡さばきは、深刻な問題をはらんでいる。この実質的無罪の判決が、大岡さばきと見られる程に、安楽死に対して、社会は肯定的でありながら、全世界に安楽死を合法化している国はない。そこに、生命の尊厳さの不可侵がある。勿論、仏教も、上述の如くに認めない。冒頭

に述べた、スイスのチューリッヒの市民投票結果がどうなるか、結果を知りたいものである。

(3) (二)「人に死をすすめてはならない」は、文字通り、苦難の人生を生きるよりは、死が勝るとして、或いは来世の安楽を説いて、自殺をすすめ、人をして自殺に到らしめることである。これも、殺人罪を犯したことになる「死こそ生にまさる」などは、仏教徒に禁じられた語句である。

心中は、仏教からいえば、悪質の殺人罪である。相手に同意を求めることは、「人に死をすすめる」ことであつて、結果は、自己を殺し、相手をも死に至らしめるので、二重の殺人となる。近頃ひんばんに起る、母子心中の如きに至つては、判断のない子供の生命を奪うもので、極重の殺人罪である。まして、母が子を殺すに至つては、言語道断のことである。

大乗の梵網経には、牛や馬や家畜を見ても、これは、若しや、我が亡き父母や肉身の誰かの輪廻の婆ではないかと思え、と言う。家畜等をうかつに、しいたげるべきではない、或いは、我が前世の姿を其処に見る思をすべきであるとも言ふ。生けるものの命を尊重せねばならぬ。それが仏教の立場である。そして、我れも人も、生れ難き人界のものとするところから、仏教の殺生戒や殺人戒が説かれているのである。



よりよく生きるために

奈良博順

(淑徳大学教授)

「殺生」という言葉は「生命の尊重」といわば逆のことを意味しているといえよう。しかもこの二つの言葉は、「生」あるいは「生命」をどのように理解するかによって、それぞれニュアンスが変ってくる。

「生」ないし「生命」といえば、私達はまず生物学的な意味に理解する、つまり、生物が呼吸したり、刺激に反応する事実をとらえて、生命があると理解する。人間にとってかけがえないのは、このような自然的、身体的な生命である。私達が、文化を語り、宗教を考えることの出来るのも、いわばこの「生きている」という事実があるからに外ならない。

ところが、今日私達が「生」あるいは「生命」について考える場合、右のような、生物のないし身体的な生命を問題にするだけではない。つまり単に生きている。あるいは呼吸しているだけでは満足しない。

例えば、医学が病氣や怪我の治療から予防、さらには保健というところまで広がってきたのは、単に生命を維持するといっただけではなく、よりすこやかに生きることが問題にすにいたったからであろう。このことは、「生」あるいは「生命」という言葉の意味が変ってきた、というより、広く理解されるようになったといえよう。

同様なことは、近頃やかましい社会福祉についてもいえる。かつては社会の底辺にあって、その日その日の生活の苦しさにあえぐ人達を、貧しさから救いあげることが問題であったが、今日では、私達が貧困な生活に陥らないように、

さらにはより文化的な生活が営まれるようにと、その問題とするとところが変わってきている。ここにも「生」あるいは「生命」の意味が広く解釈されるようになった例が見られる。

(三)

このように、「生」が単に「生きる」ということから、「よりよく生きる」ことへとその内容が変化してきていることを踏まえるならば、問題の「殺生」についても、幅広く解釈していくべきではないだろうか。というのは、従来多くの場合「殺生」といえば、生物の生命を絶つことを意味していたといえよう。しかし、「生」を「よりよく生きる」という範囲にまで拡張するならば、「殺生」の意味も「よりよく生きることを妨げること」にまで拡張するべきではないだろうか。つまり単に生命を絶つことのみが「殺生」ではない。「よりよく生きる」ことへの営みを健康で文化的な生活と云うならば、人間の健康で文化的な生活への営みを破壊するもの、あるいはそれを妨げるものは、すべて「殺生」だということである。

このような解釈が許されるなら現代社会におけるさまざまな病理的な現象に加担している人達は、すべて殺生の罪を犯していることになる。いわゆる受難地獄というような問題

をとりあげてみてもそうである。中学生、高校生の時代は、人間形成にとって貴重な時期であるにもかかわらず、それが受験勉強の故に十分なしえないということは、そのような状況を作り出している人達、あるいはその悪を知りながら、その解消に努力しない人達が、殺生の罪を犯していることになる。

あるいは種々の公害問題にしても同様である。例えば車の廃棄ガスや騒音が沿道に住む人達の健康をそこねているという事実は、犯人を特定することはできなくとも車を利用する人達、およびそのような状況を解消する努力をしない人達がやはり殺生の罪を負わなければならない。

車社会の到来といわれ、よき生活、便利な生活をもたらすはずの車が、逆に人々の生活を破壊しているということは、まことに皮肉な現象である。しかしこのことは、健康で文化的な生活、よりよく生きることの内容について、考えなおさなければならぬことを意味している。

(四)

云うまでもなく、仏教では殺生を厳しく戒めてきた。それは慈悲の心を根底にしているが、それは生をいとおしみ、はぐくむ心である。そうであるならば、殺生の意味も、単に

生物を殺すと理解するだけでは足りないものであって、先にのべたように、よりよく生きることを阻害するもの、健康で文化的な生活をそこなうこと、というところまで、広げて理解すべきであろう。しかしこのように考えてくると、車公害のように文化が人間の生活を阻害するという矛盾した面も多々出てくる。人間の宿業を負っているゆえンである。まことに「歎異抄」に「卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなし……なにごとまここに

雑 感

加 藤 正 之

(静岡県富士市在住)

『浄土』誌を購読させて頂くようになってもう十年近くになります。まずはこうした誌面に感想を載せて頂く機会のまいったことに感謝しなければなりません。わたしは生来の筆不精でし、また日頃からものごとをあまりあれこれ考えない方です。そしてご多分にもれずもともと信仰心などということに関してもきわめて迂闊なものと

まかせたることならば、往生のために千人こせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わが心のよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」とある通りであって、ほしいままなる心を捨てて、絶えず人の生活がいかなるべきかを問い続けなければならぬ。

でございます。ですから、今、何が感慨を述べるなどということはとてもおこがましいわけですが、いつの頃からかわたしも朝晩の日課十念を欠かすことのできない人間になってしまいました。仏壇に手を合わせ、一日の平安を祈念し、またその一日の無事を感謝し反省するだけの気持ちです。五十歳を半ば過ぎて、子供達を成人させ、荊妻と二人静かに「南無阿弥陀仏」と申すひと時は、わたしにはとても大切な人生の一瞬と思えるのです。たったこれだけの心持ちではありますが、『浄土』の誌面に活字として記録して頂くことは、わたしにとりましては望外の幸せでございます。



心の履歴書 八一

川内 知光

(京都市西加茂西方寺住職)

父のこと

大抵の人は父のことより母への印象が深いのでないかと思
います。

父を知って下さる方は御存知のことと思いますが、父はゆ
つとりとした、言数は少く肥っていたのです。

父は私達子供のすることをじっと黙って見ていて一言も叱

言を言ったことが無いように思います。

私が東京の宗敎大学に入学中、檀家の人が「遠い所に息子
さんを出して心配でしょう」と言ったら、うちの息子を信用
しているから、「少しも心配していません」と答えたことを
その人から聞いて、父に對して之に答えて真面目にやらばい
けないと思いました。

「良き坊さんになるためには他人の飯を食べて苦勞しなけ
ればいけない」と思つて、父に御願ひをして、住職であつて
中学校の校長をしていられるお寺に随身として住みこんで仏
敎専門學校に二学期間程通學したことがあります。随身と言

うのは小僧ではない。頼まれ小僧のようなもので、小僧同様本堂庫裡の掃除から庭の草引きまでするのですが、三度の食事は勿論置いた寺が掃除代の代償として負担するのが習慣になっていました。私もそのつもりにて真面目に良き随身として仕事をし来たつもりであります。

それから二十余年も経てからと思いますが、先生は既に他界せられて、その奥さん（未亡人）が私の寺に訪ねて来られまして先生の奥様として勿論尊敬してのですが、その奥様が言われるのには随身時代に父が毎月食費代としていくらかのお金を払っていたと言う話を聞きまして、親心と有難さに感激にむせんことがあります。

又西方寺に私の中学時代に勃落した父の兄の子供——私の従兄弟が二人来て学校に通っていたことがあります。私は勿論学費食費は伯父の宅から送って来ているものと思って年代が同じです。仲良く一緒に暮らしていたのであります。

それから何十年たって戦争の前後の食糧難時代がやって来ました。従弟のKは大農の家に養子に行つてO小学校の校長をしていました。一度会いたい来て下さいとの便りで郊外電車に乗つてその小学校を訪ねましたが従弟が言うのには、その昔西方寺に御厄介になつて四五年間一合の食費も払わずに叔父さん（父）の御厄介になつたのが私の今日あるお蔭

です。その御礼のつもりではありませんが、と言つて二斗ばかりの白米をくれたのです。実は私の方から出かけるのが礼儀ですが、長年の御無沙汰で敷居が高いので失礼でが呼びましたのです。この次からは私の方から出かけて叔父様のお墓へもお参りして、私の力にあう食糧を持参いたしますから、どうか末永く弟として御導き下さいと泣いて話したことがあります。

母のこと

亡き母は嫉の敵しい人でした。箸の持ち方まで色々とやかましく言う人でした。

母は常に金銭に負けるな、ということをやかましく言っていました。金のとりこになるなと言うことです。一番近い例で言えば人におごつて貰うなと言うことです。おごつて貰えばその人に頭が上らなくなる。卑下することになるということだったと思います。

私が国民職業指導所長時代にはその業務の性質上民間会社からの賛成をうける期会が多かったのです。ところが京

都府警察部が或る事情から、京都府下にある六つの所長の饗応を受けた事情を管内のお茶屋、席貸、料理店を一齐に調べたことがあったのです。勿論私は一件の招待をも受けていませんでしたが、他の所長は五、六件から多いのは十七件の饗応を受けていた事実が判明して、その最高の件数の所長だけが退官せしめられたことがありました。

私が東京の宗教大学に在学中、母に十円送って欲しいと言えば十五円、二十五円送って欲しいと言えば三十円と言った具合に余分に送って下さったのです。そして手紙の最後には「決して無駄使いをしないように……金に負けないように」と書き添えてありました。月末になると学友の中で金づまりの者ができますが、一元とか二元とか二、三日貸してくれと私に言ってきました。世間を狭くしないようにとの母の温情だったと思います。

職業紹介所長時代に舞鶴海軍工廠から駆逐艦の進水式のある度に案内を受けまして何回か招待を受けたことがあります。が、或る時工廠に電話して母を伴れて行って良いかと問い合せをいたしましたところ、礼服を着て来るようにとの了解を得て同伴して進水式を見たことがあります。そのあと工廠長（海軍中将だったと思います）の招宴があります。私は工廠長と同じテーブルに坐られて所謂高等並の待遇をうけていま

したが、「お母さんこのような宴会には一生出ることは無いと思いますから、私は外で待っておりますから宴席に出てみられたらどうですか」と申しましたが、そのハデな所に出たことは無いからと言って私が出席したことがあります。三十五歳の時に亡くなった母にした孝行と言えば之位でないかと思つて、墓に蒲団は着せられず、恥かしいことです。

母は昭和十二年二月十二日に私達子供も見守る中で往生の素懷を逃げられたのですが、その頃は弟と同居隠居のような形になっていました。その前月二月十一日病床から之から武さん（私の幼名）のラジオ放送があるからスイッチを入れてくれと言つて、私の放送を聞いて下さったと思います。講演の内容は青少年向きで職業人として人間を磨いて行くと云つた内容だったと思いますが、病床の母は「我意を得たり」と思つて下さったか、お前はまだまだ修行が足りないと思われたいかは聞くことは出来ません。

之は私の母に直接関係ない話ですが、昭和四十一年インド仏蹟参拝した時、インドに於ける最後の晩餐会がニューデリのホテルにて行われ一行は卓子を囲んで夕食をいたしていましたが、私達の隣のテーブルに三人の日本人の方が夕食をしていられる。どうも日本人らしいので、その席迄足を運んで「日本からですね」「そうです東京です」「新婚旅行ですか」

「そうです」

ところが今一人日本人の五十歳位の女の人が同席していられます。

「この方は？」

「母です、母が常にインド仏蹟参拝をしたいと常々申し立てましたので、此の人（花嫁）と相談して一緒に来たのです」
「ほのほのと美しい話ですね。お母さん、良いお子達をお持ちで嬉しいですね。お嫁さんも此の事だけでお人柄が良く分ります。お母さんお幸せですね。日本一の幸福人ですよ」と申しました。

「息子さん、あなたは将来人望ある良き指導者になれることは私が保証いたします。お勤めの方は勿論頑張ってください。そしてこの人の心の荒れた日本を、あなたもその一人として良き指導者になって日本を救って下さい。お願いいたします。」

それから年に一二回手紙の往復をしておりますが、彼の地位は年々上昇を続けているようです。うれしいことです。

私達の結婚当時は新婚旅行などはありませんでした。若し新婚旅行があったとしても母を新婚旅行に同行したでしょう。か。そのようなことは念頭の片隅にも起って来なかったでしょう。

聞きあわせ

何処のお寺でもそうだと思いますが、年に一回か二回位、地方から檀家の人の縁談の聞きあわせに見えます。

大体聞きあわせということは妙なものと思います。聞きあわせに来る人は大抵の場合赤の他人の初対面の人が多いと思います。その反面、聞かれる方は平素の交際もあり、道で会えば立話の一つもする間柄の人が多いと思います。その親しい人の事を初対面の人に対して色々の好ましくないアラを語るということはありえないのが当然のことと思います。解釈に苦しむのです。

ところがこの縁談の聞きあわせということが、いつごろからあるのか存じませんが遠い昔から続いているのでないかと思うのです。この赤の他人に対して近所の人の悪口やら良い事（此の場合は許せます）をべらべらと話す人があとをたたないのです。だから聞きあわせの行事が何十年か何百年が続いているのです。なかにはお座敷に上げてお茶を出して近所の人に見られては困るので、こっそりと有ること無いことを

おしゃべりする親切の人があるのです。

之は言う迄もないことですが、私の場合は檀家の中に悪い家は一軒ありません。安心してお帰りなさいと申しております。勿論お茶菓子位は出してあげます。

徴用と宇治火薬製造所

私が国民職業指導所長をしていた大平洋戦争最中の頃の話です。

国家総員法という法律があつて、その一環として国民登録令とか徴用令とか言つた法律がありまして、国民職業指導所長はその業務を取扱つていまして、私は徴用司令官ということになつていたので、国民登録は軍人軍属、軍需工場に働いている人達を除いて年令の制限があつて老人少年を除いて全男子は国民登録をしなければならず、徴用はその国民登録の中から、陸海軍の要請によつて身体検査の上徴用して陸海軍の軍需工場に労務者を送ることになつていました。戦争の激化に伴ひまして終に民間工場までが徴用工を採用することになり、京都では島津製作所、寿製作所、寺内製作所ま

でが徴用工を採用することになったのであります。

ところが陸軍直営の宇治火薬製造所は終戦に至る迄徴用工の指定工場にならなかつたのであります。

それは当時宇治火薬製造所長——陸軍の大佐中佐の人で名前は忘れてしまいましたが——が偉かつたからだと思ひます。

私は所長に「嫌々に働らきに来るようなものは満足に働らない。自分が進んで働きたいと思つてゐる者を採用してこそ軍需生産の能率が上ると思う。私が責任をもつて必要な要員を集めますから徴用をやめて本人の意志による労務者を採用しなさい」と申し出でましたところ全面的に賛意を示して下さつたのですが、勿論製造所希望の要員は完全に充足出来たのであります。徴用になれば九州に飛ばされるか、東北に働らかせられるか分らないのですが、宇治だつたら自家か通勤が出来るといふ便宜があつたので、徴用近しと思ふ人は役所に来て宇治火薬製造所に行きたいと予め申込み人が沢山あつて、それがためにいつでも要員の充足が出来たのであります。

私は誰かが大平洋戦争史を書く人があつたれば、宇治火薬製造所が終始一貫徴用しなかつた事実を書いて欲しいものだと思つております。



欧米宗教見聞録

第二回

お墓

安居香山

(大正大学教授)

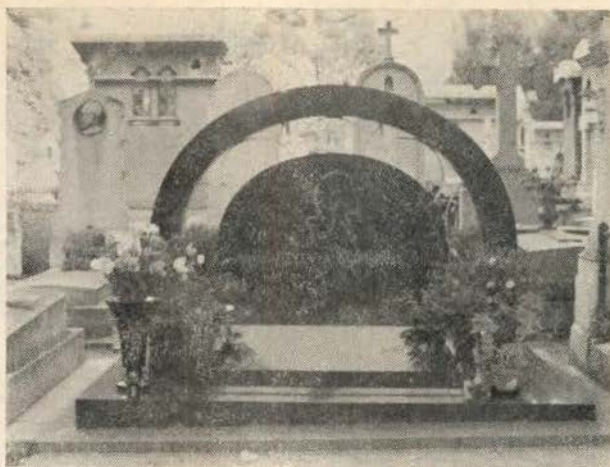
永い旅の中で、私は多くの寺院や教会を訪ねたが、それと劣らぬ数の墓地にも、足を向けた。欧米では、墓地は一般に広大で、しかも美しかった。公園墓地というか、広々とした園内には樹木が茂り、花が咲き、一見墓地というしめつぽさは、何処にも見当らなかった。祖霊が静かに眠る場所として、これ程にすばらしい所はないように思えた。

欧米の人は、一般に花が好きである。出窓に一杯の花を飾った風景は、町全体をこの上なく明るく美しいものになっている。花の咲いた植木鉢が、いたる所に置いてある。こうした花を愛する生活が、そのまま墓に持ち込まれ、墓全体が花に

埋まっているのも、多かった。墓そのものも、国々によってさまざまであるが、フランスの墓地には、流石に凝ったデザインの墓が目についた。未だうら若い女性の墓であろうか、黒ミカゲの円形の墓には、美しいデッサンが彫り込まれ、植木鉢の赤や桃色の花が、この上ない色どりを添えていた。

有名な墓にも随分お詣りしてきたが、モンパサーの墓なども、いかにも文学者らしい趣向をこらし、青銅製の本が前におかれ、それに一八五〇―一八九三年の生卒年で、あざやかに刻まれていたのが、今でも脳裏を離れない。パリーでは、この外、ボードレール、ゾラ、スタンダールなど有名な

パリーの美しい墓



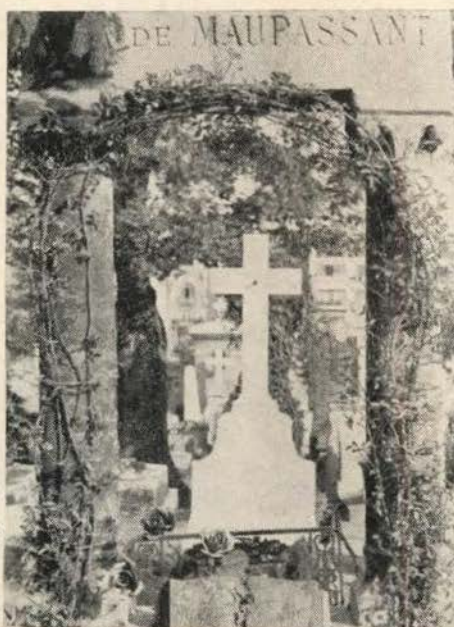
の墓に詣り、故人を偲んで歩いた。それは又、文学散歩ともいえる楽しいものであった。

ある日パリ市内の公園墓地に行き、有名人の墓をあちらこちら探していたら、制服制帽の墓守が飛んで来て、

「あなた方

は、日本人か」という。あなた方というのは、たまたまこの日は家内と二人で墓地廻りをしていただけである。「そうだと答えると、「この墓地には、日本人の墓が二基あるが、お詣りするなら、案内する」

という。「是非よろしく」ということで、案内してもらったところ、一つは「池尻富与之墓」と誌されていて、明治二十一年に、二十五歳の若年で死んだ人の墓であった。そして、もう一つのは、仲々立派な墓で「日本特命全權公使鮫島尚信之墓」とあり、「明治十五年十二月四日葬于巴里」と誌してあった。明治開国早々にこの地に來た全權であったのであろうが、この地に果てて、異境で眠ることとなったのであろう。われわれは、この二人の異境での冥福を祈って、深く頭



モンパサーの墓

鮫島特命全權公使の墓



を垂れた。

墓守と共に記念の写真をとりたいたいと思い、いろいろと懇請したが、どうしても応じてくれない。公職者として、こうしたことが許されていないのであろうか。結局われわれ二人を彼がシャッターを切る始末となり、私はその厚意を謝して、チップをはずんだ。

墓と言えば、ワシントンのケネディ大統領の墓に詣った時の印象も、忘れ得ない一つであった。その日は、午前ホワイ

トハウスを参観する機会を持った。そして大きくないこの建物には、長蛇の列を作って、参観を待った。中は極めて簡素で、それ程に広いものでなかったが、それでも外国使臣の応待の間などは、それなりのデコレーションでよく整備されていた。日本の首相たちも、ここで会談し、そして前庭の美しい芝を踏んで、散歩したのであろう。

ここには、歴代の大統領とその夫人の肖像画がかかっていたが、私の目をひいたのは、ケネディのそれであった。細身でスマートな若いケネディは、腕組みをして立っているポーズであったが、顔をやや下に向け、何か憂いげに思案している風であった。若くして凶弾に倒れた影が、そのポーズに漂っていた。

一方それとは離れたところに、あざやかなジャックリン夫人の美顔があったが、いかにもそれは、対象的であった。その足で私はアーリントン墓地に趣いたため、余計に何かケネディの墓が印象に残った。

アーリントン墓地は、ワシントンの市外にある軍人の墓地であるが、最初バスを降りた私は、小高い丘をなめるように竝んでいる、その数が無限にも思える白い墓標に、しばし茫然とした。なんとこれは、大戦で死んだ軍人達の墓で、近よって見た限りの年号は、第二次大戦のものばかりであった。

日本でも多くの軍人が、尊い命を失ったが、同じようにアメリカでも、このように多くの人の命が失われたかと思うと、戦争のむごさ、無惨さを感じずにはいられなかった。

ケネディの墓は、その奥まった小高い丘の上にあった。石



アーリントン墓地

畳の墓地は、相当広く区切られ、中央に不滅の灯が淋しげに風にゆらいでいた。

JOHN FITZGERALD KENNEDY

1917—1963

刻まれた墓石がその前に置かれ、両側に二人の娘の墓が、父をはさむように造られていて哀れ



ケネディの墓

であった。すでに他にとついでジックリーヌ夫人なき後、この墓は誰が世話するのかもしれない。勿論、国家で守られるに違いないが、無情な人生の一コマを、この墓にみた。フィリッピン人の好意で、私はこの墓前にぬかずいているところを、撮ってもらった。

シカゴでは、無垢品開教使の案内で、日本人共同墓地に参拝した。シカゴには一万五千近い日本人がいるとかで、市外の共同墓地も日本人会で購入して、使用しているもののだとい

う。広い芝生の中に、長方形の墓石が美しく並べられていた。墓石の大きさはどれも一様で、一メートルと四〇センチ位の大きであった。墓石の上には亡き人の姓名と、年号が刻まれ、造った人の名も下に刻まれていた。すべて他教徒とは限らず、あらゆる宗教の人の墓があった。道路に面して、



シカゴの日本地墓地



ハワイの浄土宗の人の墓

であろうと、墓前に涙なきを得なかった。ハワイを訪れた時も、日本人墓地に参詣した。日本人が多いただけあって、共同墓地が広がったが、墓はアメリカ本土のと同様、簡単なものであった。そして、いかにもハワイらしく、ハイビスカスの花などが、美しくそなえられていた。

「日本人共同墓碑」というのが建てられており、そこは、納骨堂にもなっていた。五月の第一日曜のメモリアルデーには、この墓碑の前で、各宗教合同の慰霊祭が、総領事出席のもとに行われるという。そこでは、僧侶が経を読み、天理教のりとをあげ、神主がお祓いするという具合で、まことに珍無類の儀式になるらしい。それにしても、遠く故国を離れて、このような所で活躍している人々は、さぞかし日本も懐しいこと



に	こ
聞	法
く	語

学問の道

宝田正道

法然上人の人と生活(三)

木曾の冠者、つまり木曾義仲が京の都へ攻め上つてきたのは、寿永二年（一一八三）の七月のことであつた。法然上人五十一歳、勢親房源智の生れた年である。

当時、天下の形勢は大体三分されていた。治承四年（一一八〇）、以仁王の令旨をかがけて挙兵に成功し、鎌倉を根拠地にして東国を手中に収めた源頼朝と、その従兄弟で同年初、これと呼応して挙兵し、信濃を中心として東は上野、北は越後、西は越前に及ぶ北方勢力圏を支配していた木曾義仲と、没落の途上にあつたといへ、京都から西部一帯にかけて依然権勢をほしきままにしていた平家とが、互いに都を攻略、あるいは奪還のために競い合つていたのである。この中で、義仲の軍勢は、越中・加賀の境にある礪波山の倶利伽羅峠で、平家の追討

軍（四万ないし十万騎という）を打破り、北陸道から近江路にかけて一氣に上洛を試みた。平安京を守つて最後の戦を画そうとしていた平家一門は、ついにたまりかねて、六歳の幼帝安徳天皇と三種の神器を奉じて西海に走らざるをえなくなった。有名な平家都落ちの一幕である。

こうして入れかわりに都大路に乱入してきた義仲の軍勢が、そこに見たものはなんであつたか。それはほとんど魔城と化した平安京と、巷にあふれる飢者、死骸の山であつた。鴨長明が『方丈記』で、いみじくも描写しているように、この年から始つた京の大凶作、大飢饉のありさまは、読む者をして目をおおしめるに足る悲惨なものである。京の都の辻々や路傍には飢え死んだ人々が

数限りなくむくろをさらし、河原などは死骸が累々として横たわっているために馬も車も通れないほどである。仁和寺の僧が道端の死者の類に「阿」の字を書いて成仏の回向をしてまわったところ、四、五の二カ月間、それも左京地区だけで四万二千三百余にも達したという。母の死んだことも知らず、その乳房に吸いついて泣きわめいている幼児や、わずかに生きながら餓鬼のように血眼で食物を求め歩く人の動きは、まさに阿鼻地獄さながらであった。

こんな状況の中へ、多くの軍兵が乱入するようになったのだからたまらない。京の町は、たちまち雑兵による徵発、掠奪、暴行の頻発となり、まさに修羅の巷、百鬼夜行の場と化したのであった。

法然上人がこの頃のことを回顧して後に述懐せられたのが、次の法語である。

われ聖教を見ざる日なし。木曾の冠者、花洛に乱入のとき、ただ一日聖教を見ざりき。

〔勅伝〕五

上人は、これより三年前の治承四年（一一八〇）頃か

ら天下の兵乱を避けて嵯峨に住しておられたと伝えられる（勅伝五）が、義山のいうように、「東山吉水ニオハシテ彼騒動（源平の乱）ニアヒ給フニヤ」（翼讀五）と考えるか、あるいは「吉水ニウツリ給テ承安ノ末ヨリ寿永ノ比マテ七八年ノ間嵯峨ヘオリオリ通ヒ給フナルベシ」（同上）とするか、疑問の余地は残るところである。しかし、いずれにせよ、吉水といい嵯峨といい、同じ洛中というべきであるから、多少にかかわらず都大路の惨状を見聞され、心を痛められたであらうことは察せられる。

法語によれば、とにかく寿永二年七月のこの日一日だけは、聖教を見ることができなかった、と上人はハッキリと告白されているのである。さすがの上人もおちおち机に向っていることができなかったのである。だから逆にいえば、この日を除く他の日は毎日、必ず読書の習慣をキチンと守って来られたと思われる。

上人が、若い頃からどれだけすさまじい勉学の人であったかは、いまだ喋々するまでもあるまい。久安三年（一一四七）、阿闍梨皇円のもとで出家し、天台六十巻を学び始めて同六年、十八歳で通世するまで、すでに「惠解天蹤にして殆ど師の授をこえたり」（拾遺古徳伝二）

といわれ、「智恵第一」「多聞広学」の名をほしいままにしたが、さらに西塔黒谷に籠居していた寂空の門をたててから、承安五年（一二七五）立教開宗して黒谷を下りるまでの二十有余年間、嵯峨の釈迦堂へ七日間の参籠をしたり、南都に諸宗の学者を訪ねて道を求めたりした以外、一步も黒谷から足を外へ運ばず、一心に書物の虫となつて勉学に励まれたのである。「一代の聖教、飢を忍んで終日披見し、諸宗の章疏、眠を除いて通夜習学す」というのは、必ずしも伝記作者（十六門記七）の誇張とはいきれない面がある。

ところで、この黒谷というところは、詳しくは比叡山延暦寺西塔北谷にあり、同山五別所の一つで、名聞利養を捨てて修行に精進するには絶好の場所であつた。そこは「谷深くして流れ淨く、鷺乱併せ去れり。路細くして、跡幽かに、隠居尤だ便あり」という地の理のうゑに、「聖教蔵に満ちて修学自由、本尊光を輝かす、行法何ぞ怠らん」（十六門記六）というのだからこたえられない。通世籠居の聖たちにとっては正に天国ともいえよう。この報恩蔵という経蔵に通つて上人は、一心不乱に出離の要道を学びとらうとされた。一切経を五遍も読み返したと伝えられるのも、ここでの体験であらう。正に黒谷

の主である。寂空も含めてこの黒谷別所の聖たちを、一般に「黒谷上人」と称していたが、のち法然上人のことをその代表のごとく「黒谷上人」と言いならわすようになったのも、むべなるかなである。

上人の読書術は特別にすぐれていたようである。それはまず篇目を見て大意をとるというやり方である。こういう徳の備わっているのは普通人でない証拠でもある。

書を見るに、これはその事を詮にはいふよと、見ることのありがたき事にて侍に、われは書をとりて、一見をくはふるに、その事を積したる書よなどみる徳の侍也。詮はまづ篇目を見て、大意をとるなり。（『勅伝』五）

右の法語のように、上人は上人流の読み方で一切経でも舶来の新書でもなんでもすばやく読みこなされたものと想像することができ。そうでなければ、何千巻という一切経を、一度ならず五度（あるいは八度）までも目を通すということは、凡人の可能な業ではなからう。「我が性の分齊、何なる大巻の書なりとも、三遍これを閲読せば文義を暗記す。本朝将来の諸宗の聖教広く披くに、

致を悟り得て皆本宗の印可を蒙りき」(十六門記七)と伝えられるくらいだからすごい。

上人はまた、学問に対する心構えとして、次のようにもいわれている。

学問ははじめて見たつるは、きはめて大事なり。師の説を伝習はやすきなり。しかるに我は諸宗みなみづから章疏を見て心えたり。

(『勅伝』五)

この中で「師の説を伝習はやすきなり」という言葉の背後には、上人の独創性と批判精神が如実に横たわっていることを知らねばならない。

こんな逸話が伝えられている(勅伝四)。上人が若い頃、天台の円頓一実の戒体について師の叡空と論争になり、さんざん立破されて立腹した叡空が上人に木枕を投げつけたことがある。つまり、口で負けそうになったから、師匠のほうがつい手を出してしまった、というわけである。上人は、議論は議論として、たとえ相手がだれであろうと、あくまで自説をまげない強さをもっていたらしい証拠である。

凡そは後学畏るべしと云ひて、学生はかならずしも、先達なればといふことはなきなり。

(常に仰せられる御詞——『勅伝』五)

この法語の中に、法然上人の学的態度が端的に現れているではないか。同じく叡空との対論の中で、こんな話も伝えられている(勅伝六)。あるとき、往生の業について称名と観仏と、どちらがすぐれているか、の問答になったが、師の叡空は最後に、先師良忍上人をもちだして「良忍上人も観仏がすぐれているといわれましたぞ」というと、上人は「良忍上人もさきにこそ生れ給いたれ」と答えられたという。つまり、学者は先輩である者が必ずしも正しいことをいうとはかぎらない、といったかったのである。この法語の趣旨はそれをさしている。

しかし、一向専修の念仏行者となつてからの法然上人は、すでに述べたように(本誌一月号)、念仏一辺倒の日日であった。学問が必要でないか、という質問に対しては、常に一切NOと答えておられる。その根拠は、いうまでもなく、凡夫出離の法、口称念仏にしくはなしという根本信念に立ってのことであるが、学問など余計なものをも身につけると、この口称念仏の本意が少しでも損

なわれることをおそれられたからであろう。その代表的な一句が次の法語である。

学生骨になりて、念仏や失はんずらん。

(常に仰せられける御詞——『勅伝』二一)

この信念は、多くの弟子をはじめ一般庶民にも次々と引継がれて、『一言芳談』などにも多数の通世者の言葉としていろいろに収録されている。たとえば、二祖聖光の弟子として九州方面に念仏を弘通したといわれる敬蓮社という人は、「日来後世の心あるものも、学問などしつれば、大旨は無道心になる事にてあるなり」と注意している。また、高野山蓮華谷聖の創始者で、保元の乱の大立物藤原通憲(信西)の十二男に生れた高野の明遍は後に法然上人の弟子となり、滅後その分骨を生涯首にかけて歩いたというほどの念仏行者となった人であるが、ある人が「学問のほど、暫、念仏の数反を滅候はん」と問うたとき、「学問は念仏を修せむがためなり。もし数反を滅らるべくは、教たてまつるべからず」と答えている(以上『一言芳談』)。上人が直接、沙弥道遍(石川入道)に示されたお言葉にも、「往生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜん程は、これを

学すべきなり」(『東宗要』)とある。いずれも、学問が念仏の邪魔にこそなれ、生死を離れる助けにはならないことを諷めているのである。だから上人は、浄土宗の学者の心得として、次のように示しておられる。

浄土宗の学者は先づ此の旨を知るべし。有縁の人の為には、身命財を捨てても偏へに浄土の法を説くべし。自らの往生の為には、諸の羂塵を離れて、専ら念仏の行を修すべし。此の二事の外、全く他の営みなし。

(『十六門記』一〇)

これは、現代の学者たちにも向けられている信行策励の矢であって、人のためには法を説き、自らのためには念仏する、この二つ以外に学者の道はないのだ、という遺誠のお言葉なのである。この法語を拝読するとき、今日の学者一般は、はたして胸を張って堂々と街を歩けるかどうか、深く反省してみなければなるまい。むろん、昔と今では学問の語義も幅も質も違う。しかし、その精神においては今一度よくよくこの言葉を拳々服膺すべきであろう。



經典を読むために

—『大藏經』の由来—

小 沢 憲 珠

(大正大学助手)

私たちが普通に知っているお経にはどんなのがあるだろうか。浄土宗にはなじみ深い浄土三部經、これはアミ

ダ經、無量壽經、觀無量經である。天台宗では法華經、觀音經、真言宗では大日經や理趣經。この外、般若心經、華嚴經などもある。また法然上人がお書きになった選択集、親鸞上人のお弟子がしるした歎異抄などもわりに知られている。

それでは「大藏經」はどうであろう。おそらく僧侶や仏教を研究する学者以外にはあまり知る人もないのではないだろうか。またこれを何と読むのだろうか。今いくつかのお経をあげたが、この外にもまだまだたくさんあ

るだろう。ところで実は、これらのお経は、大藏經といわれるものの中に全部おさめられている。

○

「大藏經」だいぞうきょうと読む。これをおおくらきょうと読む人がいておどろかされることがある。大藏經とはどういうお経ですかと尋ねる人も多い。これはアミダ經や法華經などとはちがって、固有の經典名ではない。例えば、文学作品には「世界文学全集」とか「日本文学全集」があつて、本屋さんにゆけば、だれでも手に入れることができる。これと同じように、大藏經とは、いわば仏教聖典の一大叢書といつてもよい。つまり仏教

聖典全集ともいえよう。お釈迦さまの教えのすべてが収蔵されている。まさに大きな蔵という意味である。その意味で大蔵經のまたの名を「一切經（いっさいきょう）」ともいう。だから私たちが大蔵經をひもときさえすれば、そこにはアミダ經もあれば、法華經もあって、目に触れそれを読むこともできるのである。

大蔵經の名は知らなくても、中国の小説「西遊記」に登場する三蔵法師ならば知っている人も多いであろう。三蔵法師は孫悟空らをひきつれて中国から遠くインドへ、仏教の聖典を求めるために苦難の長い旅に出る。実はこの三蔵法師とは、仏教の聖典のすべてに精通している、という意味をもっている。中国唐代の玄奘三蔵はその代表的な人である。

インドに発生した仏教は中国にもたらされる。玄奘三蔵をはじめとする多くの人たちが、シルクロードからヒマラヤ山脈を越えてインドに渡り、何年もの苦勞のすえに、ようやくして手に入れることができた仏典、これらが少しづつ少しづつ中国人の目にも触れるようになる。だがそれらはインドの言葉（主にサンスクリット語梵語ともいう）で書かれてあって、そのままでは中国人は何が書いてあるか読むことができない。中国人が読むに

は漢語に翻訳しなければならない。それには仏教に対する深い知識が必要である。またそれだけではなくて、インド語、中国語の両方に熟達していなければ、その作業はできない。三蔵法師とはまた、このような翻訳事業にたずさわった漢訳僧の大家に与えられた称号である。日本の私たちが読んでいるお経も三蔵法師が翻訳したものである。紀元後二世紀ごろから、このような人たちによって仏教の聖典は次々に漢語に翻訳されてゆく。その教も次第が増えて、これらがやがて集大成されて一大叢書としての大蔵經が成立することになる。

○

お経とは、お釈迦様ご自身が説かれた教えが書きしるされているものである。お経の一番最初の書き出しには、「私はあるときお釈迦様からこのようにお聞きしました」とある。アミダ經、無量壽經、觀無量壽の淨土三部經、あるいは法華經や般若心經などはみなお経である。これらを普通、「經藏」とよんでいる。ところが一般にお経とよばれているものは、これらの何々經というものだけではないのである。仏教の教団のさまざまなきまり、僧侶たちの日常生活の規範や作法を定めたものもある。これを「律藏」という。この外に、お経の解説書

あるいは研究書ともいうべきものや、仏教の哲学書、論理学を説くものなどがある。これらは主にお釈迦様より後の学僧たちによつて書かれたもので、「論蔵」という。この経蔵・律蔵・論蔵の三つを、三蔵とよんでいる。つまり三蔵法師というときの三蔵である。大蔵経はいわゆるお経を集大成したものであるが、厳密に言えば、実はこの三蔵を内容としているものである。

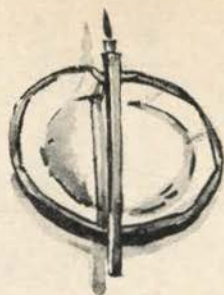
大蔵経という名称は中国でできた言葉である。インドにはなかった。しかしインドに大蔵経がなかったというのではなくて、インドでは三蔵とか一切経とよばれていた。記録によれば、お釈迦様がなくなれたあと、弟子たちは仏法が散滅するのを恐れて三蔵を結集したという。いわば聖典の編纂会議が開かれたのである。しかし残念なことにインドの言葉、特にサンスクリット語で書かれたお経の多くは散逸してしまい、その一部が今日に伝わるのみである。一方、同じインドの言葉であるペリ語で書かれたものは、タイ、ビルマ、セイロンなどに伝わり、これらは日本の仏教学者によつて日本語に翻訳され、「南伝大蔵経」六十五巻として残っている。

○
インドから中国にもたらされたのはサンスクリット語

の仏典である。漢訳僧たちはこれらを何百年もかかって漢語に翻訳した。しかし不思議なことに、中国にはサンスクリット語の原典が残っていない。とにかくおびただしい数の仏典が中国に入ったのは事実である。三蔵法師たちはこれらを翻訳したあと、原典をどうしてしまったのだろうか。これは今でもなぞになっている。

中国では四世紀の末に訳経目録がつくられている。これにはすでに六百余部の仏典が翻訳されたと記されているが、八世紀の目録には千部を越えている。また九世紀の末、宋代になると、はじめて版木に刻みこまれた開板の大蔵経ができる。これを宋蔵とよんでいる。これは版画と同じで、墨をぬれば何部でも印刷できるものである。その後でできた開板の大蔵経には、金蔵、元蔵、明蔵、清蔵があり、それぞれの時代の名がついている。朝鮮には高麗蔵がある。

日本では江戸時代に、天海板、黄檗板の大蔵経がある。また大正から昭和にかけて編纂されたのが「大正新脩大蔵経」百巻である。一巻は約千ページからなり、およそ三千部の仏典が収蔵されている。これにはインドはもちろん、中国、日本の祖師がたの著述も多く収録されている。



ハガキでひと言

彼岸に想う

十年近い。またその彼岸が今年もいつものようにやって来た。しかしわたくしは今年八十三歳を迎えての彼岸なのである。

合掌

斉藤 英明

(酒田短期大学名誉学長
山形県酒田市在住)

東北の春彼岸はいまだ肌寒い日が多い。とはいえ風雪の中の冬眠に似た生活から解放され生気がみなぎるのもこの頃からである。この彼岸の中日に、酒田市の発祥の地といわれる宮野浦(多くは農漁民)の檀徒のほぼ全員が参詣に訪れる。そして昨年度過去帳にのった方々の諷誦文を声たからかに読みあげる風習がまだ残っている。この古典的な文面の諷誦文の内容と念仏の尊さを年々新しくやさしく話しつつけて四

秦 徹 応

(大分県竹田市在住
西光寺住職)

春の彼岸と聞いただけでも、何かしらほのぼのとした心の趣きを感じられます。「もので榮えて心で亡びる」といわれる近頃の世の中の冷たくなった人の心に、『掌を合やす心』を呼び起こしてくれる彼岸。春の行楽も健康的で結構だが、

夢路を迎るような浮いたお互いの人生生活に、『合掌する心』を養って、精神的な健康を取り戻したいものだと思います。

上野 浩

(東京都杉並区阿佐ヶ谷在住)

彼岸がくるとわが国では多くの人々が墓参や寺詣で、あるいは香華、牡丹餅等を仏前にそなえすがすがしいひとときを送る。私共老夫婦も墓を訪れ、そこに眠る今はない父母と語り合うのを楽しみにしている。しかし彼岸をこのような行事に過すのみでなく、さらにその意味を考えてみたらと思う。

「彼岸」とは人間が生死の此岸を去り、超越しがたい大海をこえて、涅槃の彼岸に至ることであると書く。悟りの深い修行者は別として、愚かな私共はこの大海をなかなか渡りきれず、悩み、迷い、そして苦しんでいる。

この哀れな人間を救うため法然上人は専修念仏を教えたが、この念仏こそは一切の衆生を彼岸にわたし、妙楽浄土への道に導く渡し舟の役目をするように私には思えてならない。

春秋二回の彼岸のわずかな時のみでよい。私共はこの混沌し切った社会を省みて、人の世をいかに生くべきかを深く考え、念仏の世界にひたってゆく気持が必要ではないだろうか。

六波羅蜜で新本堂を活かす

正 本 実 閑

(社)日本原子力学会事務局長
(東京都調布市光照寺住職)

無住の荒れ寺に上山して十七年、一昨年十月十日開八記念本堂再建、つづいて歴代墓所改築、境内整備工事を了え、寺の内外は全く面目を一新した。

故友松円諦師は落慶式祝辞の中で「新本堂は大いによこしなさい。大勢の人に使われ汚れてこそ本堂は活かされる。これからが住職の責任である」と鞭撻頂いたが、後半世紀のこの春の彼岸を迎えて六波羅蜜を実践する。

世間のお役に立つ(布施)よう、襟を正して(持戒)、くじけず一步一步(忍辱)、骨身を惜しまず(精進)、じっくり考えて(禪定)、正しい知見(智慧)をもって、寺を活かす努力をつづけよう。



念佛ひじり三国志 (上)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

明遍は何かと京へ出かけてくる用事がふえた。最勝講の常席者なぞになったため、三論宗のスポークスマンみたいに扱われはじめたからである。

当時の宮廷では、宗教行事以外でも知名な僧を必要とした。

出京のたびに光堂を宿房にあてた。鐘つき守の五郎次老人と顔を合せる機会も多かった。

ところがこの老人、あれ以来きっぱりと六波羅の話題を絶ってしまった。平家への呪詛を口にしなくなったのである。

かえって明遍の方から、

「鳥辺野の姫君は達者か」

と、水を向けるほどである。

「はい、どうにか」

言葉を濁して、乗って来ない。

この変貌ぶりがぶ気味であった。老人は、もっときびしいことを、たくらんでいるのかも知れない。

承安五年の秋が深まると、すでにこの七月から安元と改号していたが、明遍は先月に引き続いて出京してきた。

「このたびは、どちらのご用事で」

出門をはいってくる明遍を、五郎次老人は鐘楼の下で迎えた。

「うむ。明後日、宇治の平等院で百僧会がある。一族の僧たちも集るのでな」

「ご一族の方々とおっしゃると」

「三井寺の澄憲や法勝寺の静憲。それに西山広谷から遊蓮房もまいる」

「みな信西入道さまのお子たちで……遊蓮房さまとは」

「信濃守是憲のことじや」

「ああ、頭（こう）の殿がたつてお聲さまにと望んでおられたお方で」

源義朝の長男悪源太義平に仕えただけあって、五郎次老人は信西一門にはくわしかつた。

久々で皆さまに会えてお楽しみでしょう、という老人の言葉さえぎって、

「それもあるが、わしは未だ宇治の鳳凰堂に参じたことがない、それも楽しみの一つだ」

明遍が言ふと、老人はちょっと驚いたという顔つきになつた。

「おや、明遍さまとしたことが、あのお堂をまだご存じないのですか」

「おぬしは知っているのか」

「知るも知らぬも、ひところはあの寺で暮していたことがこ

前号のあらすじ

信西入道が平治の乱に憤死してから、その遺児達の運命も数奇なものとなった。なかでも長兄の信濃守是憲は、いまは遊蓮房円照と名を改め、西山広谷にあって念仏信仰に励んでいた。もとより世間を離れた円照にも数々のでき事が起つたが、念仏の声とともに契りを結んだ藤原實子の非業の死はあまりにも悲しい事件であつた。しかし黒谷の沙門法然房源空にめぐり会えた喜びはひとしおのものであつた。

一方、奈良の小禅師と呼ばれた明遍得業も、いまは南都三論の学院として命名を馳せており、すでに最勝講にも名を連ねていた。そして承安三年（一一七三）五月の最勝講には、明遍が五日目の結願の夕座を勤める大役であつた。しかもこの折の講には、叡山の重寶葉室流顯真僧都が沈黙の振舞いのうちにみずから大原に隠棲する決意を示した。桑門における名利や権力に対する反抗であり、出家世界への腐敗に対する怒りであつた。それも平家一門の全盛がもたらした世の乱れでもあつた。果して明遍は、そうした榮華の陰にひそむ大きな悲劇を宿房とする光堂の鐘つき男の五郎次老人によって鳥辺野の闇の中で知らされる。

さいます」

「五郎次は何処にでも住んでいたんだな」

あきれるほどの寺院通である。

宇治の平等院は、関白頼通が父道長の別荘であつたものを

＜鳳凰堂＞



寺院にあらためたのである。

——極楽いぶかしくば、宇治の御寺をうやまえ。

そんな言葉が貴人たちの間でかわされたほどである。

極楽浄土の実在を疑問に思う者は、いちど宇治の鳳凰堂へ
いってみよ、という意味だ。なるほど此処こそが極楽浄土
よ、と納得するだろう。

鳳凰堂以前は、法成寺の金堂が現前浄土だった。

関白道長はその晩年、京極御殿の隣地に阿弥陀堂を造立し
た。一代の仏師康尚に九体の阿弥陀仏を彫像させ、安置し
た。阿弥陀堂のすぐ裏側に寢殿を作り、そこに寝起きし、つ
ねに金堂にこもって常行念仏に明け暮れた。

ために「御堂関白」と呼ばれた。

道長は万寿四年（一〇二七）十二月四日に世を去った。そ
の臨終は、加持祈禱の僧いっさいを退けて、この阿弥陀堂へ
こもった。

丈六（一丈六尺）の阿弥陀仏九体をふり仰ぎ、常行念仏を
執持しながら静かに息を引き取った。

脇息にもたれ、たえず乱れる裾をただしながら往生の素懷
をとげた——

と六代の後裔にあたる慈円は愚管抄でこのお先祖をたたえ
ている。

美々しい莊嚴、いかめしい宗教的雰囲気、これらに包まれての静かに人生を終えてゆくことが、当時の往生観であった。

死者の表情、死の直前に現れた奇瑞めいたもの、それらが語り伝えられて死者の価値を高めたのである。

これほど立派な御堂関白を誤解して、そしつたりした一条天皇が、この直後に夭折したのは当然だろう。

と、慈円は「たたり」の筆を舞わせている。

この法成寺金堂は、道長の死後三十年ほどして全焼してしまつた。いちおうの復興はみたが、もはや昔日の面影はなかつた。

現前浄土は、息子頼通が造立した宇治の鳳凰堂へ集つていった。

「百僧会と申しますと、誰方が信心のご施主ですか」

「九条兼実卿だが、それは表向きで、平相国だ」

「やっぱり。平相国も近ごろしきりと九条殿に色目をお使いになる。法皇の側近が、いよいよおだやかならぬ動きをはじめましたからな」

「法皇に最も身近な法勝寺の兄も宇治へやってくるぞ」

明遍は兄静憲の名を持ち出して、五郎次のあらぬ憶測を打ち消した。

「あのお方は平相国にもたいへん信頼されております。さよう、あのお方がいらつしやらなければ、とくに法皇と平相国は仲違いなさつていたのではありますまいか」

「そんなことかのう」

久しぶりで五郎次は多弁になっている。

「ところで百僧会とすると、入位のご法師はやはり十名で」「うむ」

「御座主は、どなたさまで」

「それが異例だ。平相国みずからがお坐りになる」

「ひやあ、あの浄国が百僧会の座主に……権僧正の座には」

「明雲座主だ」

「天台座主が権僧正の座に……あきれたもんです。大僧都、僧都がお二人づつ付かれますが、それはどなたで？」

「五郎次は何でも知っているのだな」

明遍はあきれる。百僧会の構成を知りつくしているだ。

「明遍さまは律師の座で？」

「いや、わしは已講じやな」

座主以下、権僧正一名、大僧都、僧都が各二名、律師、内供、已講、阿闍梨が一名づつで中心の十僧が構成され、あとは九十名の衆僧がこれに随喜するのである。

「明遍さまは侍者に誰をえらびますか」

「侍者か。誰か光堂にいる小坊主でも」

「それならば是非お願い申上げたい童子がおります」

「どこの童子か」

「それはお許し下さい。ただし明遍さまには絶対にご迷惑をおかけ致しませぬ」

平相国が、座主を勤める百僧会と聞いて、俄かに思い立ったな、と明遍は心を緊張させた。

とにかく明夕、此処へつれてくる。会ってみてくれ、と五郎次老人は頼みこんだ。

二

童子――

ではなかった。鐘つき守の小屋で明遍がみたその若者は、身体こそ少年なみだが、もう立派に成人している。しかも瀟とした面魂である。

「この方は？」

明遍は粗略な呼びかたをしてはならぬと直感した。若者の身辺から威厳のようなものが漂ってくるのである。

「明遍さまゆえお打明け申します。頭の殿の忘れがたみ、九郎さまでござりまする」

「九郎どの、か」

源義朝が愛妃常盤御前との間に儲けた九郎義経である。しかし明遍はそんな遺児がいたことすら知らなかった。

「佐馬守どのの忘れがたみと言えば、伊豆に流された佐殿（頼朝）だけだと思っておったが」

「いや、平相国は常盤さまをお許しになられ、三人のお子さまを助命したのでございます。そのお一人がこちらの九郎さまで。まあ、ご存じのようにご自身の容色を、いけにえにされて、お子さま方をお助けしたようなもので」

明遍が知らぬ事情を語ってくれた。

清盛は三人の子と引きかえに常盤御前をおのれの慰さみものとした。

しかし正妻時子の嫉妬が強かったのか、常盤自身に魅力もとほしかったのか、じきに清盛は敵將の妻を捨てた。貧乏公卿の後妻に押しつけた。そして三人の子らは、それぞれ寺院に入れられて、喝食くわじきになったのだ、という。

おのれの身にまつわる不愉快な話である。だが若者九郎は表情一つ変えないで、五郎次の言葉に耳を傾けている。

「それで、いま九郎どのは何処で暮しておられるのか」

「何処と申して定まった住居はありません」

はじめて若者は口をきいた。女人のように細い声だった。

鞍馬寺の喝食となつて幼年期を送つた義経は、その後縁あつて奥州へ藤原秀衡を頼つていった。そこで元服したという「京へまいったのが、つい四日前、ただいまは鳥辺野の洞で寝起きしております」

「あ、あの姫君がおる洞窟か」

危うく「狂つた」と言おうとして明遍は声をおさえた。

義経秘密の上京に五郎次老人が手引きをしているのは、まぎれない事実だ。

「五郎次、それでこの九郎どのを、明日宇治へお連れするか」

「かないませぬか」

「いや、髪さえ剃り落せば立派な侍者童子でとおる。しかし……」

「しかし、何でございますか」

五郎次は詰め寄ってくる氣迫をかくそうともしない。

「明日百僧会のお導師は平相国だ」

「さようで」

「さようで、ではない。大丈夫か」

老人はからからとうち笑つた。

「あ、そのことで。九郎さまが平相国の命をねらつたりするのではないか、と明遍さまは懸念なされておる。そういうこ

とです。まだまだそんな時節ではござりませぬ。またお力もない、のう九郎さま」

義経はこっくりとうなずいた。うなずいたあと、頬に少年そのままの笑くぼをうかべた。

いかにも可愛ゆげのある若者だった。

「では目的は、何だ？」

「見おぼえておくのです。平相国のお顔をしっかりと見定めてくるのです」

「見おぼえて——」

「さよう。いつか時節到来の折には、あやまたずに清盛入道のお首を掻き落さねばなりませぬ。そのためにも」

しっかりと見おぼえておかねばならぬ、と老人はわがことのように語氣を強くする。

もはや拒否するわけにはいかなかった。

「つれてまいらぬと申せば」

と、明遍は視線をかえした。鋭い老人の眼路と交錯した。

「お察しのとおりで」

五郎次は磊落に笑いとばしている。かたわらで九郎義経も笑くぼをうかべた柔和な表情でいた。

翌朝、明遍は逢髪を剃り落した源九郎義経を侍者に連れ、宇治平等院へ向つた。鈍色の法衣に身をくるみ、経箱をかつ

ぐ姿はいかにも侍者童子そのままである。

誰が平相国の首をねらう源家の御曹子と見抜くだろうか。

明遍は、心地良い風が胸廓を吹きぬけてゆくのかを感じた。

現代流に言えばスリル感である。

宇治平等院の鳳凰堂——

前面に池を配し、複雑な屋根形をしたこの瀟洒な中堂は内外をびっしりと僧で埋めつくした。

定朝の作と言われる丈六の阿弥陀像を安置する内陣には平相国以下の入位の僧が居並び、堂外には九十名に及ぶ衆僧がひしめいていた。

折から快晴に恵まれて、鳳凰堂の名を裏付ける左右両翼の棟上で、たくましい形の鳳凰一対が、まさに飛翔せんばかりの姿勢で群僧を見おろしていた。

百僧会はつつがなく、厳肅にいとなまれた。平清盛も平素の権力者の顔は、つゆ見せず、殊勝な導師役をつとめ終えた。これで、藤原宗家への政治的布石は終えた、と言わんばかりに、左大臣兼実へ愛想のいい言葉をかけると、堂外で待機していた一門の兵士たちにかこまれ、さっさと六波羅へ引き揚げていった。

ほっと胸を撫でおろしたのは、ほかならぬ明遍だった。百僧会のさなか、どこかへ姿をかき消した源九郎義経が騒ぎら

しいものを起してくれなかったからである。

清盛の顔を見おぼえておくためだけに——出かけるときは、そんなつもりでも、いざ眼前に父の仇、母の凌辱者を見たら、若者の血は煮えたぎらずにはおれぬだろう。

安堵した明遍は、あらためて鳳凰堂の内部を拝観することにした。

堂内中央を占める丈六の阿弥陀坐像。左右の長押には、諸菩薩、比丘が美々しく雲中を群舞している。

「浄土曼陀羅だ。宝楼閣そのままを模している」

誰にともなく話かけるような声に、明遍はふりかえった。兄の遊蓮房円照が背後に立っていた。天井に配した蓮華座の鏡を見上げている。

三

遊蓮房円照は無位の僧だったが、今日は格別に内供の座を与えられていた。清盛の好意によるものだった。

だが、よほど身体の具合が悪いのだろう。式中たえず咳こんでいた。

「兄上、大丈夫ですか。こんなところにきていて」宿房で横になっていた方が、と言いかける明遍をさえぎっ

て、

「いや、これを建てた頼通卿も、また御堂関白もじゃな、いまのわしと同じじゃよ」

と円照は青白い顔を、ひつつらせるようにして笑った。

「兄上と同じとは？」

「どちらも此処をやられておった」

胸先を軽く叩いた。労咳の死病にとりつかれていたというのである。

死期が迫ったのを感じ、俄かにこれから往く、いや往きたいと願う現前浄土の阿弥陀堂を造立した。

「しかし此処は末法の初年に当るといふ考え方が頼通公が……」

「それはあとからつけた理由よ。あの人々は誰のためでもない。おのれ一身のためだけにこしらえ上げたんだ。せめて間に合ったことが良かったようなものだ」

円照の言葉には皮肉がからんでいる。そしてかみこむと、激しく咳こんだ。明遍は兄の背中を撫でさすった。

「兄上、さあ宿房へまいりましょう」

「いや……やっぱりあの人が申したとおりだ。こんな贅美をこらした阿弥陀堂は何の救いにもならない」

「あの人は——」

「法然房源空」

「そう言えば、近ごろ法然房は黒谷を出て西山へゆかれたとか」

「うむ。広谷でわしと一緒に修法しておられる。法然房はつきりと言った。むかし法成寺の金堂も、ここの鳳凰堂も観無量寿経が説く九品の往生観をそのまま写している」

「上品上生の阿弥陀仏から下品下生まで……」

「そうだ。しかしもはや現在の大衆には、そうした阿弥陀仏は無縁なものとなってしまった」

「あそこになります阿弥陀如来は、われわれを救って極楽浄土へ導いては下さらぬのですか」

「観無量寿経の下品下生は説く。この愚かな衆生の命終に臨んで、眼もくらみ、息も苦しくなったとき、どうして仏の姿を念じ、見ることができようか。すでに観念の念仏は存在しなくなる」

「あとは——」

「声を発して、阿弥陀仏の御名をと念えるだけだ。それしかできない。末法末世とは、富める者も貧しき者も、智慧ある者も無知な者も、この眼がくらみ息もとだえんばかりの下品下生の者と同じ状態にある。だから称名念仏以外に救われる道はないのだ」

＜九品九生＞



「とおっしゃると、さきほど平相国以下私どもが執持した念仏は？」

「全く無用なことだったな。黙して、念じて、日想観から次々と九品の往生観を追ったが、実のない形式であった。あれは結局、平相国のお祭り騒ぎだけだった」

法然房源空は、この年の春、黒谷を出て西山広谷の遊蓮房円照のもとへ移り住んでいる。はっきりと旧体制の仏教と袂別した。

鳳凰堂の莊嚴が描き出す観念の念仏では救いが得られぬと断じた。専修称名念仏を確立した。

だから後世の浄土教徒は、この承安五年春を、浄土宗開宗の年としたのである。

さて鳳凰堂内の信西入道の遺児たち。

再び三たび円照は身を折り曲げて咳こんだ。袂から布片を取り出して口もとをおさえた。

それをぬぐい取ったとき、布片は真紅の色で染まっていた。胸部から吐き出された血であった。

「兄上、いけませぬ。横になられぬと」

「いや、こんな場所では往生はできぬ」

「……」

「御堂関白や頼通卿と同じ道をたどるのは、まっぴらこ免

だ。わしは西山へ帰る」

「これからそのお身体で」

「法然房のもとへ帰る。救いを頂けるのは、あの人の膝もとだけだ」

血しぶきで襟もとを濡らしながら、円照はなおも言い張るのであった。

このとき一人の僧が兄弟のかたわらへ駆け寄ってきた。

「舟の用意がしてある。円照どの、西山へ帰るのなら、ゆっくり舟の中に横たわってゆかれるがよろう」

俊乗房重源であった。

つねに何処からかつ然と現れる法師である。

「しかし宇治川から西山へ水路は通じていますまい」

「なあに今夜は木津の宝積院にでもお泊りになればよい。光塵坊、おぬしの宿房だ。円照どのを頼みますぞ」

ついてきた若い侍者をかえりみて命じた。

「舟は……」

「さよう、この光塵坊が漕いでまいる。心配はいらぬ」

何から何まで手はずがそろっている。

若い侍者は円照の身体を抱きかかえるようにして平等院を出ていった。柵外の水路がそのまま宇治川へ通じるのである

「光塵坊は若い、あれで万事にソツのない男だ……うむ、

若いと言えば明遍どの。そなた今日はたいへんな侍者をつれてこられたな」

「重源どののはあの男を、いやあの僧をご存じで」

「源家の御曹子九郎義経ではないか」

堂内にはまだ平家に関係の深い僧が何人かいた。重源の大声が明遍の身をすくませた。

「どこで知ったんですか」

「鞍馬寺に九郎がいたところからの顔見知りだ。それより明遍どの、おぬしはどこで」

重源を堂外へ連れ出さねばならなかった。周囲の耳が危険だった。池のほとりへきて、立ちどまった。そこで九郎義経を五郎次老人から紹介されたことを告げた。

「光堂の鐘つき守で、悪源太義平の家臣となあ。さて誰だろう」

重源はしきりに思い出そうとしている。心あたりがあるのかも知れない。

人影が二人の背後に立った。

明遍がふり向くと、九郎義経だった。

「おお、いまそなたの話をしていたところだ。何処へいってあったのか」

「はい、しばらく平相国の行列をつけてみました」

「行列をつけたと？ 危険な」

「どんな警護ぶりをするか、たしかめておかねばなりませんね」

義経は淡々と語っている。どこまで肝っ玉の太い若者だらうか。

「九郎どの、わしじゃよ。以前鞍馬で」

と、重源はそこで名乗り出た。義経も記憶していたようである。

「わかりました。鞍馬で三重塔を作っていらしたご法師」

「よくおぼえていたな」

「忘れませぬ。しょつ中手伝いになり出されましたもの」

仕度第一の俊乗房は、あちこちの寺で造堂建塔をしてまわっているのである。

「ところで九郎どの。どうだ、平泉の藤原秀衡公は」

「元気でおります」

「寺の方は？」

「寺と申しますと」

「中尊寺だ。あの光堂は完成したかな」

「いいえ、一部だけ残してございます」

「この前わしが出かけた折は、清衡公、基衡公のご遺骸をおさめた墓壇ができておったが」

「つまり秀衡公ご自身の墓壇の分が未完成になっているのでございます」

「おお、自分自身の葬堂をな」

重源の話は、いつもおおらかで、のどかであった。七面倒な政情がからんでいない。たった今、宿敵平清盛の顔をしっかりと見定めて復讐心を燃やしたはずの九郎義経も、重源のベースに引きこまれ、おだやかな表情で遠い奥州の都の話、次々に語り綴った。

明遍は、ふと兄円照の身を思った。あの調子では長くはもつまい。いや本人自身、それを十分覚悟しているのだ。だからこそ病軀をおして今日の百僧会へ出かけてきたに違いない。

平等院の鳳凰堂に現前する極楽浄土が、信じ得るものかどうかを確認するために。

そしてきっぱりと否定して、専修念仏の法然房のもとへ帰来していったではないか。

人が命終に臨んで、眼もくらみ、息も苦しくなったとき、果たして観照をこらした見仏や光明真言の呪文をとなえたり、土砂を加したりする臨終行儀が可能であろうか。

やはり法然房が説く専修称名念仏しか残されていないのである。か細い声で、必死に助け給え、と阿弥陀如来に呼びかける称名念仏だ。

(つづく)

二 編集後記 二

○今年の服装をうらなうファツションショ
ーが過日東京帝國劇場で華やかに開催され
たが、共通テーマは「ヒューマニズム（人
間性）」という由。いかに外見を装っても
着る人の心が豊かでなければ折角のニュー
ファツションも死んでしまうであらう。服
装界に限らず最近の社会全体を見渡すと、
こうした傾向が見られる。この心の枯渇を
潤すためには、その底辺にある私たち一人
一人がそれぞれ与えられた立場を自覚し、
お互いを尊重し合つてこそ満されることにな
るであらう。

○間もなく統一地方選挙を迎える。選挙の
たびごとに私たちは大変おいしいエサを与
えられるが、それも選挙が終つてしまうと
カラ念仏に等しいものとなつてかえつてく
るのが常である。よりよき生活実現のため
に、小さな事項であっても実現される政策

を大いに期待して一票を投じたいものだ。

○三月は彼岸の月でもある。ことに春の彼
岸には、厳寒の冬がほぐれて、待ちに待っ
た穏やかな氣候が用意される。まさにお寺
まいり、お墓まいりには絶好の時節。喧噪
な日頃の生活のあわたしきから開放され
て、思い出深き亡き人々への真摯な追慕と
ともに、みずからの心に向けてゆつくりと
反省してみたい。

○本誌「浄土」も四十一年目に入り、会員
各位のご支援ご助力により着々と歩みを進
めています。ことに誌面の充実をはかるた
めに一層の努力をいたしていますが、併せ
て本年は「ハガキ通信欄」を設け、会員各
位のご意見やご感想をおうかがいし、皆様
との交流を深め、念仏信仰への道をより高
めて行きたいと思っております。どうぞ時
候の感慨や信仰に対するお考え方などおま
とめ願えれば幸甚です。なお、弊会への新
加入会員のご紹介にもよろしくご協力下さ
い。

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年二月二十五日 印刷
昭和五十年三月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト
教育えほん
『ほうねんさま』

B 5 判 12 ページ 定価 200 円



『五重相伝の手引』

A 5 判 16 ページ 定価 85 円
(200部以上 80円・送料実費)



『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述
新書版 204 ページ 定価 200 円



好評『法然上人と浄土宗』

B 6 判 96 頁 定価 180 円 (〒70 円)
(200部以上 単価 160 円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番